

等に係る疫学的調査(第Ⅲ期調査 平成12年度～平成16年度) 第二次交絡調査編: <http://www.rea.or.jp/ire/pdf/report3cf.pdf>.

放射線影響協会(2010), 原子力発電施設等放射線業務従事者等に係る疫学的調査(第Ⅳ期調査 平成17年度～平成21年度):

<http://www.rea.or.jp/ire/pdf/report4.pdf>.

放射線影響協会(2015), 低線量放射線による人体への影響に関する疫学的調査(第Ⅴ期調査 平成22年度～平成26年度): <http://www.rea.or.jp/ire/pdf/report5.pdf>.

原子力発電所の安全審査と再稼働 No. 13

国策の最終的な選択基準としての 思想・哲学, 倫理観

佐藤 暁

さとう さとし
原子力情報コンサルタント

川内原子力発電所1号機が再稼働しました。原子炉臨界, タービン併入, 発電機併入(送電開始)と進み, 中央制御室内で拍手する九州電力の職員の姿も報道されましたが, どこか微妙な違和感がありました。公益事業を営んでいるはずの彼らが, 多くの鹿児島県民や国民に嫌がられて公害事業を再開するかのようと思われるながらこれを行わなければならなかったのですから, ロケットの打ち上げ成功を喜ぶオペレーション・ルームの光景とは違います。

結局, 「やめてほしい」, 「待ってほしい」と言う人々にとってはそれが無視されてしまったという点で, 一方, 九州電力にとってはそのような多くの顧客や国民の思いに逆らってしまったという点で, 川内の再稼働は, Lose-Lose のイベントとなってしまいました。

福島事故後, 「原子力を選ぶか否かは, 科学でも経済でもない, 最終的には, 生き方の選択であり, 哲学とか倫理学の問題に行き着くはずだ」との意見が聞かれました。川内の再稼働をめぐる世論を見て, この前段には, 「規制基準の適合でもない」, と付け加えてもよいのかなと感じました。

支持や推進をするにしろ, 反対をするにしろ, 自分なりの思想・哲学, 倫理観をもつことは重要だと思います。私も長年原子力に関わってきた中で, 福島事故が発生する前から, いろいろ自問自答を繰り返してきました。

2014年8月号から連載を続けてきた「原子力発電所の安全審査と再稼働」は, 一応, 今号をもって本論を締めくくりたいと思いますが, それにあたり, 本テーマにちなみ, これまで私自身の心中に去来した考えなどをいくつか述べてみたいと思います。

1 宗教的考察

原子を破壊してエネルギーを取り出す技術

1個1個の原子の誕生は, 地球の年齢45億年よりも遥かに古いのです。その原子を壊してエネルギーを取り出す技術, それが原子力技術です。原子力発電所の一労働者の身分でありながら, そのことに, 宗教的な背徳性を抱いたことがありま

す。これはもしかして, 旧約聖書にある「バベルの塔」を築くような行為ではないのか? 後で大きな罰を受けることにはならないのか?

そこで, これを打ち消す「解釈」はないものかとよく考えていたものです。ある日, それが閃きました。天然ウランには2種類の同位体があるが, 核分裂性のU-235が0.7%, 非核分裂性のU-238が99.3%なのはなぜか? それは, 核分

裂性のU-235の半減期(7億400万年)が、U-238のそれ(44億6800万年)よりも短いからなのですが、これから逆算をすると、20億年前の天然ウランには、約3.6%のU-235が含まれており、今のよう濃縮をしなくても、ただ化学的に製錬さえすれば核燃料ができてしまいます。

しかし、もしそのように易々と核燃料ができてしまうと、いろいろな人たちが勝手にどんどん原子炉を作って事故を起こし、大変なことになってしまいます。そこで神様は、人類の誕生の時期を決め、人間がある程度の技術的な能力を成熟させるまでそれが使えないよう、難しさを添加したわけです。ただし、あまり難しくし過ぎても人間が困るので、容易さも同時に用意していました。それは、核分裂によって発生する生成物の中に、後からゆっくりと中性子を放射する成分があることです。この「遅発中性子」がないと、爆弾は作れても原子炉は作ることができませんから。これをこっそりと用意してくれていたということには、それなりの意味があるに違いない。

このような「天界の秘儀」を理解し、必要な技術力が熟したときによく使えるように条件を整え、神様は人間が原子を壊してエネルギーを得ることを許してくれたのだろう。したがって、原子力の利用は悪ではなく、堂々と人類の平和のために使ってよいエネルギーなのだ。

このような「解釈」を構築したことで、心置きなく原子力に没頭できると思ったものです。

福島事故の意味

それから長い年月が経って福島事故が起きました。私が編み出した「解釈」もぐらつき、「バベルの塔の崩壊」を思い出しました(やはり、神様の意思に沿った正しい使い方をしなかったことに対する罰なのだろうか?)。心当たりがあるだけに、まずはそう思いました。

——神様は、人を罰するにしても、いきなり無慈悲に最も厳しい仕置きはしないはずだ。そういえば、何度か事前の警告を発してくれていた。2005年8月16日の宮城県沖地震で、女川原子

力発電所の設計基準地震動が超過したこと。しかし私たちが警告を無視したため、2007年3月25日には能登半島にある志賀原子力発電所にも軽い打撃を与えて警告を繰り返し、さらに同年7月16日には、柏崎刈羽原子力発電所にかかり厳しい警告が加えられた。——

「二度あることは三度ある」が、まさに起こったのですから、これはいよいよ、と私たちは気づくべきだったのでしょうが、2011年3月11日まで、のりくらの対応しかしていませんでした。

(しかし、福島事故は最後の大関だったのだろうか? 一層厳しいながらも、これもまだ警告のうちなのだろうか?)

あの日の出来事を振り返ってみると、確かにいくつかの「手加減」も感じられます。津波の襲来が、ほぼ干潮の時刻だったこと。もし満潮の時刻だったとすると、女川原子力発電所の敷地にも津波が押し寄せていたはずでした。福島第二原子力発電所では、非常用ディーゼル発電機が全滅でしたが、所外電源の1回線だけが生き残り、その電源を発電所に受け渡す変圧器も、油漏れを起こしながら辛うじて生き延び、これによって、4基の原子炉に対する減圧と注水が可能となりました。また、3月11日以降はしばらく好天が続き、屋外の活動ができました。雨で全面マスクのフィルターが濡れて閉塞したのでは、呼吸できません。

——もし、福島第一に加えて女川と福島第二も事故に陥っていたらどうなっていたか? 事故が福島第一ではなく東海で起こり、成田空港が汚染していたら? 浜岡で起こり、東名高速道路と東海道新幹線が遮断されていたら? 若狭湾で起こり、琵琶湖と京都の歴史資産や宝物が汚染してしまっていたら? 本社が東京にない電力会社だった場合どのように政府との連携ができていたのか? 資産規模が小さく、従業員数の少ない電力会社だった場合、事故対応と賠償はどうなっていたのか? ——

福島事故は十分厳しいものではありましたが、もっと厳しい試練を受ける可能性もあったのです。今度こそ正しく天意を読み取らないと、次は本当

に「バベルの塔の崩壊」か「ソドムとゴモラの硫黄の雨」が、罰として用意されているのかもしれませんが。「世界最高水準」とか言う私たちの謙虚さのない発言や、「2030年の原発比率20~22%」という発表を、天上の神様はどう聞いていることか。愚かな私たちをどうか許して下さいと願わずにはいられません。

隠蔽の是非

もちろん「是」であろうはずはありません。ところが、さまざまな秘密を抱えてしまうと、隠蔽を是として認め、やがて「善」と肯定しようとさえしてしまいます。これは、原子を壊してエネルギーを取り出す技術に関わることよりも、もっと個人的なことで、長年、大きな苦悩でした。

どの民間企業も同じだと思いますが、顧客と接する機会のある社員は皆、「顧客を敬い全力でサポートせよ」と教育されます。顧客の不都合な事実直面し、「これは口外無用」と言われれば、「私たちはお伝えすべきことはお伝えしました。後は良きにお計らい下さい」と離れます。が、事態によっては極めて後味の悪いときもあります。社会的に認められない処理を画策していることを察知するとき、顧客を敬い全力でサポートすることのモチベーションは、著しく低下します。

そのようなとき、どうやって失いつつある顧客への敬意を回復したらよいのか。会社は、「上司に相談しなさい」、「誠意を尽くして顧客に正論を説き、正しい処理に導くよう全力で協力しなさい」と言いますが、現実には容易ではありません。強力な抵抗や制裁に遭うからです。

そんな苦悩の最中、「鼓腹撃壤」の故事に出会いました。古代中国の名君、堯に関する話です。堯は、自分の治世に人民が満足しているのか否かを知ろうと、目立たない身なりで市井に繰り出します。そして、ある老人が、食べ物を口に含み腹鼓を打ち、こう歌っているのを聞きます。「日が昇れば耕作し、日が沈めば休息する。水が飲みたければ井戸を掘って飲み、食べ物を食べたければ田を耕す。帝の力が、どうして私に関わりがあろ

うか。」帝である堯は、満足して質素な宮殿に帰って行きます。堯が目指す善政は、人民が、政治が行われていることさえも感じない平穏な世の中を維持することだったからです。私はこれを都合よく借用しました。

国民は、せっかくの寛ぎの時間を、原発の故障の報道で煩わされるべきではない。テレビで野球を観るなり、家族でのんびり一日を振り返るなり、楽しいことに時間を費やすべきだ。面倒な原発のトラブルでバタバタするのは、私たち当事者だけで十分だ。規制者やメディアに報告しない顧客の小悪は、大善として大目に見られるべきだ。

このように思い込むことで、私は何とか顧客への敬意を維持しようとしたが、顧客の対応はどんどん悪質化していきました。隠蔽の対象は重要な安全設備に関するものへと及び、そして、隠蔽から捏造へとエスカレートしていきました。

かつての「暗黒時代」を知る者からすれば、あの出来事以来、日本の原子力もだいぶ健全になったと思います。しかし、果たして及第点に達していたのか、仮に一旦はそうだったとしても、その後も維持されていたのかはわかりません。

鼓腹撃壤は自己欺瞞でした。自分の中にしまい込み、誰にも宣教しなくてよかったと思います。今私が、現役の原子力関係者と共有したい教訓は、次の福音書の言葉です。「覆われているもので現されないものはない、隠されているもので知られずに済むものはない。」「暗闇で言ったことはみな明るみで聞かれ、奥の奥で耳に囁いたことは屋根の上で言い広められる。」「あなたの髪の毛一本までも残らず数えられている。」

2 哲学的考察

福島事故後、ベンサム功利主義(最大多数の最大幸福)について考えました。日本でも話題になったハーバード大学の政治哲学者マイケル・サンデル教授の「ハーバード白熱教室講義録」でも取り上げられている課題の一つです。これは、私たちが、日常的な判断指標としてはほぼ妥当なものを受け入れているものですが、サンデル教授は、いくつ

かの非日常的な例を引き合いに出し、学生たちと議論を進めていきます。

さて、たとえば、原子力発電がなくなることによる直接的、間接的な影響によって、日本の失業率が1.5%上昇するとします。就労可能人口を6425万人として、100万人近くの失業者が発生するわけです。ちなみに、福島事故による避難者は、2012年12月の時点で約16万人と推定されていました。

この場合、ベンサム哲学によれば、原子炉事故の後でも運転を続けること、あるいは、短期間停止した後でも一刻も早く再稼働することが正しい選択ということになるかもしれません。福島第一の状況がやや落ち着くと、案の定、国は、具体的な数こそ挙げませんでした。いつまでも原子力発電を送電系に復帰させないことによるマイナス効果をアピールし始めました。

「国民諸君、さあ、どうする？」、まずはこの難問を提示して世論を牽制しておき、次に、「この難しい選択は政府の責任として決断するしかない」と主導権を確保し、再稼働や原子力発電への風当たりを弱める……。

国の手管は、政権交代の前後を通して、だいたいこんな風だったように思います。結果的に私たちは、以下の事実によって、ベンサム哲学のジレンマ——より多くの国民の幸福のため少数者の犠牲を容認すること。この場合は特に、再稼働に同調することによって、福島事故の避難者の無念な思いを黙殺すること——に悩まされることはありませんでした。

まず、国が「夏場の電気不足で停電が発生し心臓ペースメーカー使用者の命が奪われる」と言っても、国民は一丸となって節電に努め、電気不足による停電の口実を与えませんでした。「電気不足と電気料金の値上がりによって倒産件数が激増し、多くの労働者が路頭に迷う」という予言(?)も外れ、2010年度の全国倒産企業1万3321社、負債額7兆1608億円に対し、2011年度はそれぞれ1万2734社、3兆5929億円という実績でした。

結局、もともと原子力発電は、ベンサム哲学のジレンマの題材になるだけの、多くの国民の幸福への貢献をしていなかったということになります。むしろ逆に、原子力発電を排除し、事故の危険を除去することで多くの国民の幸福に貢献する一方、少数者であるかつての利益享受者に忍従を求めるといってこそ、「最大多数の最大幸福」が実現するということになります。

つまり、「最大多数の最大幸福」のための原子力発電という正当性が失われ、「最大多数の最大幸福」のための原子力発電撤退が大義になってしまったということです。もちろん、日本では、国も電力会社も、まだこの逆転現象を認めてはいません。いずれにしても、忍従を求められる少数者の不利益が最小限になるように調整されることが理想だと思います。まるで報復や制裁のように原子力発電に臨むことが、ベンサム哲学の正しい適用だとは思いません。



倫理的考察

国の倫理観

このところなぜか国は、国民を騙すことばかりに汲々としているように感じられます。愚かな国民には真実や現実と向き合う理性がないと見下しているかのようです。2012年の夏、電気不足が予想されたときも、まるで、自制心のない国民には以前と同じように電気を使いたいという欲望を抑えることができず、どうせ尻に火がつけば原子力発電所の再稼働を容認するだろう、と読んでいたように感じられました。実際は、慌てず騒がず、平然と劇的な節電をやったのけ、その成果を静かに喜びました。

福島事故の発生当日、もし「メルトダウン」を発表していたら、果たして避難は大混乱し国民は総パニックになっていたでしょうか。そのような発表にかかわらず、双葉郡の住民は、実際のあの日のように秩序正しく、国民も冷静に行動していたと思います。東京電力の事務所や経営者、社員宅が投石された、放火されたという出来事も聞いたことがありません。日本人のモラルは、国が思

っているよりも遥かに洗練されているのだと思います。

そのような自国民の理性を信じず、独り相撲を取る国が、実にみっともなく感じられます。しかし国は、相変わらずこれを改めず、「我が国の原子力は世界最高水準」と嘯き、国民を騙し続けます。実はそうではないからと言って、国民にとって衝撃的でしょうか。慟哭も怒声もなく、普通に受け入れるでしょう。むしろ、自国民をまるで敵であるかのようにいつも騙そうとする歪んだ倫理観の国に、国民は辟易しているはずです。

公益事業の倫理

電気が高いと不満に思っている人々は多いようです。しかし、50ワットの電球を20時間灯し続けるのに必要な1kWhでさえ、ほとんどの人々にとっては、電力会社に支払う料金(30円前後)の何倍も費やさない限り、あるいは費やしたとしても、自分では発電できません。実際は、電気だけが特殊ではなく、世の中に流通している物資のほとんどすべてがそうなのですが、どれも感謝して使いたいものです。そして、日本の津々浦々に電気を供給する電力会社にも感謝し、同時に、電力会社には、国民に感謝してもらえよう営業してほしいものです。実際、そんな良好なWin-Winの関係が、電力会社が原子力発電を導入するまで、国民と電力会社の間にはあったと思います。

それが原子力によって劣化していった原因と過程は、次のようになります。

まず、原子力発電所の建設工事は、他の発電技術よりもはるかに多額の費用を要します。これが、銀行、大手建設会社、プラント・メーカー、地元企業を流れます。竣工し、営業運転が始まると、今度はその操業コストが発生し、そのうちの燃料費を除く「運転・保全コスト」が、同じ設備容量(たとえば100万kW)の火力発電所に比べて数倍かかりますので、再び巨額が流れ、これが周辺にあるさまざまなものを絡めつつ進化していきます。つまり、

パワー(電力) = マネー、

マネー = パワー(政治力)

の方程式で強固な複合体(通称「原子カムラ」の基盤)ができあがります。仮にある電力会社の電源構成において、火力発電と原子力発電の比率が3:1であったとしても、原子力マネーのほうが大きな政治的影響力をもつようになります。2:1, 1:1ともなれば、もはや圧倒的です。

すると電力会社にとっては、国民とのWin-Winの関係よりも、こちらの関係でWin-Winを維持するほうが大事になります。もちろん、電力会社の良心的な経営者にとって、公益事業の原点に立ち返って考えるとき、倫理的な悩みはあると思います。社会に感謝されない会社、社会に恨まれる会社。何とか変えたいと思っているに違いありません。

公衆を原子炉事故の危険に曝すことの犯罪性

日本では、一人の人間を「罪人」にすることはとても重いことで、原子力安全の問題においては、少々の過失があっても実害を及ぼさない限り、あるいは実害を及ぼしたとしても、厳しく求刑されることはなさそうです。この点、米国はまったく異なります。実害を及ぼさない場合でも、隠蔽、捏造、不作為の結果引き上げられた原子炉事故リスクに公衆を曝した場合には、まるで殺人未遂を犯したかのように極めて重い懲役と罰金が求刑されます。

昔、米国人と仕事をしていて、報告書の修正を提案したりすると、いきなり険しい顔つきになり、「オレを刑務所送りにしたいのか!」と言い返されることがありました。別に捏造を要求していたはずもなく、当時は大袈裟なりアクションだと思って余り気にも留めてはいませんでしたが、今から思うと本気だったのです。普通に仕事をしているだけと想定していても、とにかく米国人の仕事仲間には、「刑務所行きは御免だ!」を口に、少しでも罪に触れることを恐れます。

この日米差の研究は、関心のある法律の専門家に託したいと思いますが、米国での厳しさによる原子力安全の視点からプラス効果、逆に日本での

甘さによる弊害があったのか、興味深いテーマではないでしょうか。

科学者の良心

映画「ドクター・ストレンジラブ」のモデルとも言われているエドワード・テラー博士。後に「水爆の父」と呼ばれる彼は、マンハッタン計画のときから水爆の開発に執心しており、その威力は原爆を遥かに凌ぐと予想していたことから、広島に投下される約1カ月前(1945年7月16日)の史上初の核実験(トリニティ試験)に立ち会った際、1万2000mにまで立ち上ったきのこ雲を見ても、「なんだ、こんなちっほけなものか」と漏らしたと言われています。

テラー博士は、原爆の1000倍の威力をもつ水爆の炸裂によって空気中の窒素までもが核融合を起し、さらに発生エネルギーが増幅されるのを期待していたようです。博士には博士流の平和論があったようですが、核兵器廃絶を求める人々からすれば、彼らの切なる願いを無視した史上最強・最悪のマッド・サイエンティストでした。

テラー博士とは違い、活動の場が発電用原子炉に限られ、これに関わった日本の学者は、原発推進の国策を支援するためにおいてさえ、さほど重要な寄与をした足跡を残してはいませんが、強いて言えば、結果的により負の貢献をしたと言えなくもありません。というのも、原発推進の学者は欧米にもいるのですが、彼らは単に推進するだけでなく、同時に懸命に不安全性を摘出して分析し、解決を見出そうとする原発安全の探究者でもあったのに対し、日本における彼らの役割は、国策の後援者か保証人で、ほとんどの場合、安全推進には積極的に貢献しなかったからです。

ただし、日本の原子力関係の学者には、そのようであったことに対する反省の念が、あまり沸いてくることがないのではないかと思います。もともとの関わり自体が、原子炉設備の開発や設計などの本流ではなく、たとえば材料劣化現象など、細分化された分野別の研究プロジェクトなどだったからです。しかし、そんな彼らが「御用学者」

と揶揄されるのは、必ずしも不当ではありません。国民は、もっと積極的で良心的な彼らの関わりを期待していたからです。

世の中の平和の攪乱を意図し、破壊を企てるのに科学を悪用するマッド・サイエンティストではありませんが、自らの社会的地位に相応しい良心的貢献を怠る科学者は、時に同じ悪影響を世の中に及ぼす場合があることを、福島事故からの教訓としてほしいものです。

4 原子力発電に対する史観

発電用原子炉の基礎技術は、炉型ごとにそれぞれの国で開発、完成、実用化されていきました。沸騰水型、加圧水型の軽水炉が米国によって、重水炉がカナダ、ガス炉が英国、黒鉛減速型の軽水炉がソ連によって。それらの歴史は1950年代にまで遡ります。液体金属を冷却材とした高速増殖炉でさえ、その第一号が発電したのは1951年12月のことです。

爾来、基礎技術においては、それほど画期的な進化があったわけではありません。進化したのは、いくつかの改善と、安全上不完全であるがゆえに求められた技術分野だけだったと言えるかもしれません。基礎段階で出運れた日本は、精密で高品質の製品を作る技術と、合理的な建設技術では傑出していますが、検査・診断、補修技術では世界的に平均かそれ以下であり、確率論的な安全評価や、原子炉事故の進展評価においては、むしろかなり後進的でした。

これら後から進化してきた技術は、総じて言えば、原子力技術の足腰を強くするというよりも、まとわせる鎧を増やし重くする技術だったとも言え、経済的なパフォーマンスを徐々に低下させました。安全上は重要であっても経済的に魅力のない分野だっただけに、日本においては、そのような活動に、気鋭の科学者が登用される機会も少なかったのでしょう。その実態が露呈したのが、福島事故直後だったと思います。

これが、長年体たらくの続いてきた高速増殖炉や再処理施設のプロジェクトに及んでいないこと

を、国民は何を根拠に信じていることができるでしょうか。原子力委員会が発行した昭和55年(1980年)版の「原子力白書」には、次のような文言が踊っています。高速増殖炉に関しては「昭和70年代に本格的な実用化を図る」、再処理に関しては「昭和65年頃の運転開始を目途に……」。ちなみに原子力発電に関しては「昭和65年度において、(略)、必要な設備容量は、5,100~5,300万キロワット(注：電気出力100万kW用の原子炉で換算して51~53基)と見込まれている」とあり、さらにウラン濃縮に関しても「……早期国産化に向けて官民の協力による積極的な努力を進めていく必要がある」とあります。結局、今日までかかってどれ一つ実現しませんでした。そして、実現しなかったことによる国民の不利益もありませんでした。

欧米では、フェーズアウトが進んでいます。これには2種類あるように見受けられます。一つは経済的フェーズアウトで、米国においてがそうです。安価なシェール・ガスを燃料とする火力発電との競争、規制の重圧、予想される高額な修繕費の支出に耐えられず、運転継続を諦めるケースです。福島事故前には104基あった運転プラントが、今は99基に減少しています。

欧州では、隣国への気遣いによるフェーズアウトが進んでいます。たとえば、事故を起こして汚染水をドナウ川に垂れ流してしまったらどうなるか？ オーストリア、スロバキア、ハンガリー、セルビアの首都を次々と汚していきます。

日本においても、今後は廃炉プラントが増えていきます。今再稼働をしても、いずれ運転プラント20基、廃炉プラント40基のようなバランスになり、運転プラントの稼ぎが廃炉の支出で打ち消されるときがきます。今さら仕方のないことですが、「原発は高い」がいつそう実感されていくことになるでしょう。

5 日本と欧米の安全思想と国民性

アスベスト、PCB、ハロン1301は、それぞれ耐熱材料、絶縁油、消火ガスとして優良な奇跡的な特性を有します。しかし、健康と環境への有害

性から製造禁止となっています。アスベストとPCBは、使用も禁止されています。ハロン1301はオゾン層破壊物質であり、欧州では2003年以降使用禁止ですが、日本においては使用が認められ、奨励さえされています。消火ガスとして配備しても、実際に火災が発生して環境に放出される量は微々たるものとする日本に対し、欧州では、より厳しい深層防護の考え方から、そのような妥協を許しません。

欧米の原子力では、実際に一度でも発生した事故や事象は、無条件に将来の再発を考慮してその対応策を用意しますが、日本ではその防止策の用意に止まります。これが、福島事故後の違いとなって如実に表れており、たとえば、同時複数基での事故発生や、所内の危険が増し職員が撤退しなければならぬ事態の想定は、まさに福島事故において現実に経験されていたにもかかわらず、対応策に取り組んだのは日本ではなく、欧米なのです。

日本の原子力におけるこの場合の防止策は、設備を増強し備品を揃え、手順書を作って訓練を反復することで一応達成されたと思われがちですが、欧米では、いつも同じ訓練の反復ではなく、イレギュラーを加えた「不意打ち」への対応能力を鍛える訓練に力を入れています。

原子力発電所の安全性は、設備の安全性も重要ですが、まずは安全な場所に建てられることが前提で、事故の発生に対する備えも重要です。

ここで思うことは、もし、以上に例示したように、深層防護に対してより厳しい考え方をする欧米の人々のメンタリティをもって見た時、日本の原子力発電所の立地条件や安全対策が、どのように映るのだろうかということです。

2012年3月22日。この日は、ヴァーモント・ヤンキー原子力発電所の40年の運転認可が失効し、NRCが承認したこれに続く20年間の認可更新が発効する初日でした。本社ビルは反対を訴える1000人以上の市民に取り囲まれ、130人以上が不法侵入で逮捕され、中には93歳のお婆さんも含まれていました。(結局、同原子力発電所は2014

年末日で運転を終え、現在は廃炉となっています。)

カリフォルニア州のディアブロ・キャニオン原子力発電所に対する反対運動の場合はこの比ではなく、数万人規模のデモが何度も行われ、1981年には2週間の逮捕者1900人で、地元の刑務所が定員オーバーになったと伝えられています。正義を確信したときの米国人には、逮捕され投獄されることをまったく恐れない度胸があり、それを称える国民性があります。

ここで思うことは、このような気性をした人々の多い米国で福島事故が発生していたらどういう行動が起こっていたか、再稼働に対してどのように反応していたか、司法はどう処理していたかということなのです。

⑥ 日本における原子力発電の大義？

かつての推進の大義がなくなり、今は、「ベスト・ミックス」、「エネルギー・セキュリティ」といった言葉を織り交ぜ、せめて維持の大義を守ろうとしています。他にも、経済性、CO₂排出削減・温暖化対策、国富の流出、科学技術振興、等々ありますが、どれも十分な説得力を感じさせません。そんな中とうとう、「張子の虎としての原子力発電所の必要性」という大義まで出てきました。

核兵器の製造ポテンシャルを示威するためにこそ原子力発電所は必要。自他共に認める軍事通の自民党有力議員が、大真面目にこんなことを語っています。1年間で製造できるとも。これに評論家としても活躍している有名な漫画家が違和感を覚えたとして、仮に本当に1年間で製造できるにしても、そんな泥糺みたいことをやっている間にボコボコにされてしまい、抑止になどなるはずがないではないかとコメントしています。

このようなデタラメが言えるのは、かの議員自らも実際に作ることはないと言っており、どうせばれないからなのでしょう。しかし、そもそも、張子の虎を張子の虎と公言し、なお抑止力になるものなのでしょうか。

それはさておき、軽水炉の使用済燃料から取り

出したプルトニウムで核兵器を製造した例は、世界的にもありません。実際、その一同位体であるPu-240の含有率が高過ぎるため、放射線レベルが高く、自発核分裂が活発過ぎ、取扱いが危険で難しいと言われています。そして、作れたからすぐの実戦用として使えるわけではなく、実験、すなわち核実験が必要です。もちろん製造自体、国内においては非核三原則、国際的には核拡散防止条約に対するあからさまな違反です。また、今や核兵器と言えばプルトニウム爆弾の1000倍も強力な水爆が主力であり、プルトニウム爆弾を作っても対等の抑止力にはなりません。ちなみにソ連は、原爆の開発を成功させてから水爆を完成するまでに、4年を費やしています。

もはや、安保問題どころではありませんが、もし仮に「1年で原爆を作れ」という号令が下った場合、どこにそれを技術的に担える拠点があるのでしょうか。福島事故に対処する術がなく、原理的に米国が1940年代に稼働させたものと同じ再処理工場の建設工程は何十回と遅れ、もんじゅは相変わらず泥沼の中なのに、実はこれらの「二軍」とは別の「精鋭部隊」が存在し、さっとそれを遂行するというのでしょうか。先の漫画家のコメントももっともなのですが、エドワード・テラーのような群を抜いたマッド・サイエンティストが出現しない限り、そもそも無理です。

それにしても、こんな暴論まで必要になるとは、原発の大義も、今や墮ちるところまで墮ちたという印象が否めません。日本もいざとなったら核兵器を製造する能力があることを仮想敵国に印象づけ、抑止力にするという考え方は、戦術的にも正しいようには思えません。むしろ逆に、日本が原子力発電所を臨海に多数設置していることで、すでに仮想敵国に「準核兵器」を進呈しているとも見ることができます。つまり、そのような国は、わざわざ核ミサイルを発射するまでもなく、通常兵器や特殊部隊を使って原子炉事故を起こさせるだけで、瞬間的な破壊力や殺傷力はないものの、十分に日本を混乱させるだけの効果が得られるからです。

7 正しい国策の選択と決断

我が国の総ての禍根は、……、小欲に囚われていることだ、志の小さいことだ。吾輩は今の世界において独り日本に、欲なかれとは註文せぬ。(中略) 否、古来の皮相なる観察者によって無欲を説けりと誤解せられた幾多の大思想家も実は決して無欲を説いたのではない。彼らはただ大欲を説いたのだ、大欲を満たすために、小欲を棄てよと教えたのだ。(中略) しかるに我が国民には、その大欲がない。朝鮮や、台湾、支那、満州、またはシベリヤ、樺太等の少しばかりの土地や、財産に目をくれて、その保護やら取り込みに汲々としておる。(中略) 卑近の例を以ていえば王より飛車を可愛がるへぼ将棋だ。(中略)

何もかも棄てて掛るのだ。これが一番の、而して唯一の道である。しかし今の我が政府や、国民の考え方では、この道は取れそうにもない。その結果はどうか、わかっておる。(中略) どこまで行っても勝味はない、失敗に失敗を重ねるだけだ。(中略)

もし政府と国民に、総てを棄てて掛るの覚悟があるならば、会議そのものは、必ず我に有利に導き得るに相違ない。例えば満州を棄てる、山東を棄てる、その他支那が我が国から受けつつありと考うる一切の圧迫を棄てる、その結果はどうか、また例えば朝鮮に、台湾に自由を許す、その結果はどうか。英国にせよ、米国にせよ、非常の苦境に陥るだろう。何となれば、彼らは日本にのみかくの如き自由主義を採られては、世界におけるその道徳的位地を保つを得ぬに至るからである。その時には、支那を始め、世界の小弱国は一斉に我が国に向って信頼の頭を下ぐるであろう。インド、エジプト、ベルシャ、ハイチ、その他の列強属領地は、一斉に、日本の台湾・朝鮮に自由を許した如く、我にもまた自由を許せと騒ぎ立つだろう。これ実に我が国の位地を九地の底より九天の上に昇

せ、英米その他をこの反対の位地に置くものではないか。(中略) 遅しといえども、今にしてこの覚悟をすれば、我が国は救われる。しかも、こがその唯一の道である。しかしながらこの唯一の道は同時に、わが国際的位地をば、従来守勢から一転して攻勢出でしむるの道である。

これは、当時の日本に対する軍縮交渉でもあったワシントン会議の開催を控え、「東洋経済」社説、大正10年(1921年)7月23日号に寄せた石橋湛山なんざん(後に、第55代内閣総理大臣)の「一切を棄つるの覚悟」と題した論考を、随所、短縮したものです。

結果的にわが国は、「小欲」を断つことができず、連合国によって完膚なきまで叩きのめされ、さらにそのツケを、南京事件や従軍慰安婦問題などをめぐる隣国とのギクシャクした問題、沖縄県の米軍基地問題などとして、今日まで引きずる運命を歩んでしまいました。

これまでの過保護な原子力政策は、「王より飛車を可愛がるへぼ将棋」との表現に重なるところがあり、どこまで行っても勝味がなく失敗に失敗を重ねる、とのくぐり、わが国の核燃料サイクルに対するこれまでの体たらくと行く末に対する予言でもあるように感じられます。「結局、飛車は失い、王は雪隠詰めに遭う」、と湛山は述べています。日本の官僚と政治家には、今一度、何が小欲で、何が大欲かを正しく見極めてほしいと思います。